

福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告書

1999年3月

福島県西白河郡矢吹町教育委員会

福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告書

1999年3月

福島県西白河郡矢吹町教育委員会

序 文

わが矢吹町は、中通り地方の南部、白河市と郡山市のほぼ中間に位置し、人口約19,000人の農業と商業を中心とした「さわやか田園都市・矢吹」にふさわしい自然環境豊かな町であります。旧石器時代から平安時代に至る遺跡も、町のいたるところに見られ、歴史と伝統の町として連続と発達してまいりました。

近年、福島空港の開港など当町を取り巻く開発環境は著しく、とりわけ東北自動車道矢吹インターチェンジから、福島空港を經由して磐越自動車道小野インターチェンジへ通じる福島空港・あぶくま南道路（トライアングルハイウェイ）の開発は、当町のみならず県で提唱している「あぶくま新高原構想」「うつくしま未来博」等や、首都機能移転の受け皿として重要施策となっております。

今回試掘調査を行いました上宮崎、下宮崎および白山地区の遺跡も、トライアングルハイウェイの開発予定地であり、その内容を記録保存し、ここにその報告書を刊行することになりました。本書が文化財の保護、学術研究の資料の一助になれば幸いです。

最後に、調査を担当していただきました福島県教育庁文化課 大平好一文化財主査、元文化課 日下部善己氏 小林雄一氏 財団法人福島県文化センター遺跡調査課 石本弘氏、ならびに特段のご指導とご協力を賜りました福島県教育庁文化課、財団法人福島県文化センターに深く感謝申しあげます。

平成11年3月

福島県矢吹町教育委員会

教育長職務代理人 伊 藤 浩 喜

緒 言

1. 本報告書は、矢吹町教育委員会が実施した福島空港・あぶくま南道路建設に関わる埋蔵文化財の分布調査事業の報告書である。なお、ここで報告する遺跡のうち、上宮崎A・上宮崎B・小又・下宮崎A・白山A・白山Cの各遺跡は、平成9年度に発掘調査が行われ、平成10年度には報告書が刊行されている。
2. 矢吹町教育委員会は、下記の要項で試掘調査を実施した。

調査要項

遺跡名	上宮崎A遺跡他
所在地	西白河郡矢吹町上宮崎・下宮崎・白山地内
調査面積	2,720㎡（調査対象面積：54,700㎡）
調査期間	平成8年10月21日～11月1日・9月2日～9月13日・9月24日～10月4日・11月19日～20日
調査主体	矢吹町教育委員会 教育長 坂本迪郎
担当者	小林雄一（福島県教育庁文化課 文化財主査） 大平好一（福島県教育庁文化課 文化財主査） 石本 弘（福島県教育庁派遣 県内市町村埋蔵文化財調査技術協力職員 財団法人福島県文化センター文化財主査）
調査員	青木紀男（矢吹町教育委員会文化振興係主事）
事務局	矢吹町教育委員会 藤井良男（矢吹町教育委員会文化振興係長）
作業協力	斉藤好司 東条覚 斉藤二郎 小針一正 関根フミヨ 関根保夫 酒井アツ 佐久間マツヨ 坂路トミ 仮田元宏 加藤正直

3. 本報告書は、石本が執筆・編集した。
4. 出土した資料と作成した記録は、すべて矢吹町教育委員会が保管している。
5. 調査作業や整理作業にあたっては、下記の機関および方々の協力・助言をいただいた。（敬称略）
福島県教育庁文化課 （財）福島県文化センター あぶくま高原自動車道建設工事事務所
佐藤耕三 大越道正 福島雅儀 菅原祥夫 国井秀紀 関加奈子 今井久子

用 例

1. 挿図の用例は次のとおりである。
 - (1) 遺構図の方位は磁北を示す。
 - (2) 縮尺は遺構・遺物の特性にあわせ、適宜選択した。
 - (3) スクリーントーンなどの用例については、各挿図中に示す。
2. 使用した略号は次のとおりである。
矢吹町…YB トレンチ…T 遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…Ⅱ 竪穴住居跡…SI
掘立柱建物跡…SB 土坑…SK 溝跡…SD

目 次

第1章 調査経過	1
第1節 矢吹町の地形と遺跡	1
第2節 調査経過	3
第2章 調査の成果	5
1. 上宮崎A遺跡	5
2. 上宮崎B遺跡	8
3. 小又遺跡	11
4. 下宮崎A遺跡	15
5. 白山A遺跡	19
6. 白山B遺跡	19
7. 白山C遺跡	22
第3章 ま と め	28

挿 図 目 次

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	図13 下宮崎A遺跡検出遺構(2)	17
図2 上宮崎A遺跡トレンチ配置図	5	図14 白山A遺跡トレンチ配置図	18
図3 上宮崎A遺跡検出遺構(1)	6	図15 白山A遺跡出土遺物	19
図4 上宮崎A遺跡検出遺構(2)	7	図16 白山A遺跡検出遺構(1)	20
図5 上宮崎A遺跡出土遺物	8	図17 白山A遺跡検出遺構(2)	21
図6 上宮崎B遺跡トレンチ配置図	9	図18 白山B遺跡トレンチ配置図	22
図7 上宮崎A遺跡検出遺構	10	図19 白山C遺跡トレンチ配置図	23
図8 小又・下宮崎A遺跡トレンチ配置図	11	図20 白山C遺跡検出遺構(1)	24
図9 小又遺跡検出遺構(1)	12	図21 白山C遺跡検出遺構(2)	25
図10 小又遺跡検出遺構(2)	13	図22 白山C遺跡検出遺構(3)	26
図11 小又遺跡検出遺構(3)	14	図23 各遺跡出土遺物	27
図12 下宮崎A遺跡検出遺構(1)	16		

第1章 調査経過

第1節 矢吹町の地形と遺跡

地形と地質 矢吹町は福島県中通り地方南部にあり、総面積60.8km²の農業を基幹産業とする町だが、東北自動車道の開通と共に矢吹インターチェンジ付近には各種工場が建ち並び、西白河郡の中核として工業化が進みつつある。矢吹町の地形は、「矢吹が原」と呼ばれる台地、平坦な台地に半島のように東西方向に延びる丘陵、町内の東を画する阿武隈川と西を流れる隈戸川の造る段丘群と氾濫原の3つの要素の分けられる。矢吹が原の台地は南西部で標高290m台、北・東方に向かってやや高度を下げ280m台になる西高東低の地形である。このような台地状の平坦な地形は北は郡山市から南は中島村まで広く分布しており、郡山層と呼ばれている。この層は砂・粘土・泥炭・礫などで構成されており、新生代第四紀洪積世の中期に凝灰岩丘陵の谷間を埋めて堆積したことが知られており、当時この一帯沼沢地であったことがうかがえる。台地上の丘陵尾根部の標高は西部で330m台、東部で300m台で、平坦部と同様東に向かって低くなっている。これらの丘陵の地質は、3層の洪積世前期の火山砕屑流堆積物である石英安山岩質凝灰岩（白河石）から構成されている。また、これらの丘陵や台地の土層には那須火山を噴出源とする火山灰の堆積が厚く見られる。阿武隈・隈戸両河川流域の段丘地形は、大別して3つのグループに分けられる。低い方から沖積段丘・第1段丘、第2段丘である。これらの段丘の形成に際し、両河川の河床の低下があったことは明らかであり、その原因として奥羽脊梁山脈の隆起、郡山盆地の沈降に伴う河川勾配の変化、気候変動に伴う降水量・植生などの河川環境への影響の変化が考えられる。また、以上の河床低下に伴い、矢吹が原には中小の河川の浸食による、浅い谷が刻まれるようになった。今回調査の対象とされた地域は、矢吹町東部の県道千五沢矢吹線と県道石川矢吹線に囲まれた丘陵地帯である。

遺跡 矢吹町では、現在112ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が周知されている。町内最古の遺跡は後期旧石器を出土した陣ヶ岡遺跡で、これは鏡石町にまたがっている遺跡で、鏡石町では成田遺跡として著名である。縄文時代の遺構・遺物は、下荒貝・芹沢・東ノ内Aの各遺跡で早期の土器が出土している。芹沢・北田遺跡は中期中葉の土器を出土するが、前期の土器も若干混っている。柏山遺跡では後期初頭の土器が出土している。弥生時代の遺跡は、萱山・愛宕下・一本木遺跡などがある。古墳は阿武隈川西岸に古墳群を形成しており、谷中・鬼穴両古墳群が後期群集墳として、また横穴式石室・埴輪を持つ古墳として著名である。古墳時代から平安時代の古代集落としては、古墳時代では大久保・下荒貝・鉢内・行馬遺跡など、奈良時代では大和久・南町E・名代A遺跡が、平安時代では天開・笹目平・古館遺跡が発掘調査されている。特に古館遺跡では斎串が出土し注意される。かに沢瓦窯跡は白河郡家に瓦を供給している。

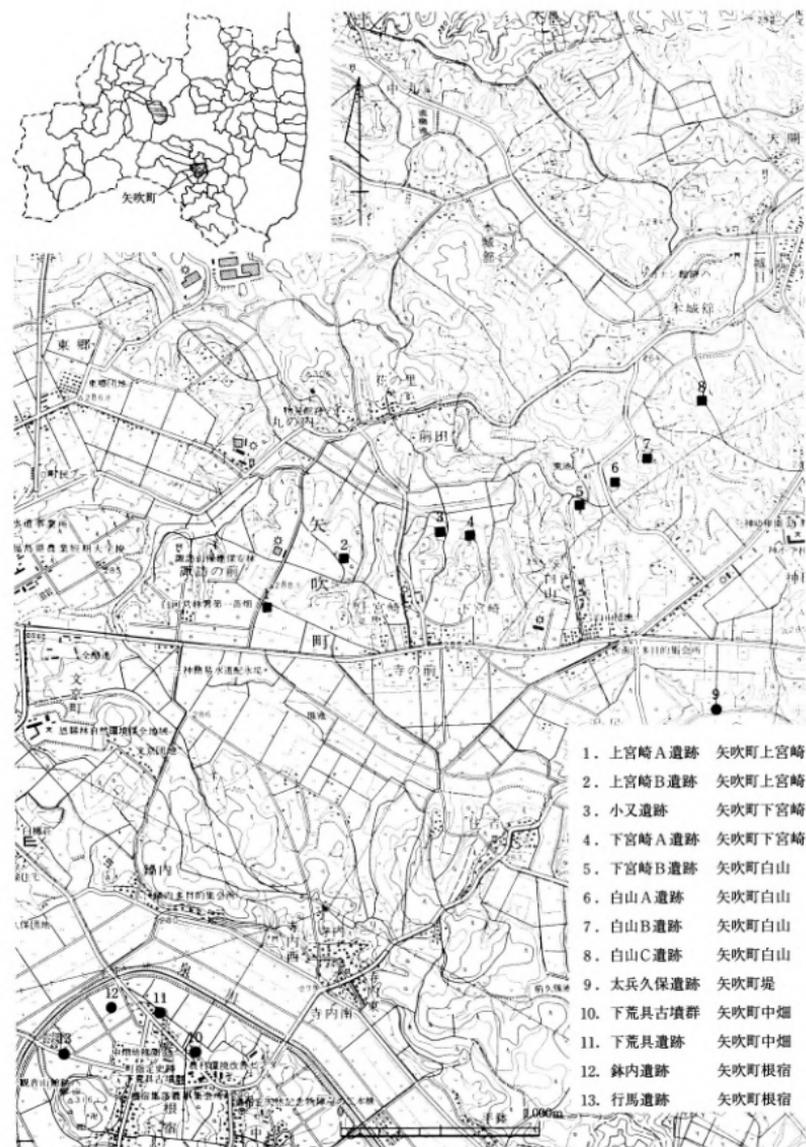


図1 遺跡の位置と周辺遺跡

第2節 調査経過

福島空港・あぶくま南道路は、本県南部の高速交通網整備の一環として計画された東北自動車道矢吹インターチェンジ（以下、ICとする）と福島空港、さらには磐越自動車道小野ICを結ぶ高規格道路である。

福島県土木部あぶくま高原自動車道建設工事事務所（以下、工事事務所とする）は、平成8年度工事発注路線内の埋蔵文化財分布調査を町教育委員会に依頼したが、平成8年5月23日、工事事務所建設課芳賀英次建設第1係長、同佐藤岩男主査、福島県教育庁文化課小林雄一文化財主査、財団法人福島県文化センター遺跡調査課石本弘文化財主査が矢吹町役場に集合し、町教育委員会職員と共に日程・表面調査範囲などを確認したのち、上宮崎地内白河営林署矢吹種苗事務所農園の東側から、県道中畑須賀川線までの約3.3kmの表面調査を開始した。調査は24日と27日の3日間行い、上宮崎地内で2ヶ所、下宮崎地内で2ヶ所、白山地内で3ヶ所の遺物散布地を発見し、さらに周辺遺跡の小又遺跡の遺物散布範囲拡大を確認した。以下がその新発見遺物散布地と確認遺跡の8ヶ所である。

表1 発見・確認遺跡一覧表

遺跡名	所在地	遺跡面積 (㎡)	試掘対象面積 (㎡)	備考
上宮崎 A 遺跡	矢吹町上宮崎 144 番地他	13,200	9,100	
上宮崎 B 遺跡	矢吹町上宮崎 259 番地他	12,600	8,900	
小又 遺跡	矢吹町下宮崎 37 番地他	36,800	9,200	
下宮崎 A 遺跡	矢吹町下宮崎 166 番地他	13,400	11,800	
下宮崎 B 遺跡	矢吹町下宮崎 316 番地他	1,300	-	
白山 A 遺跡	矢吹町白山 177-1 番地他	10,900	10,900	
白山 B 遺跡	矢吹町白山 375 番地他	10,300	5,900	
白山 C 遺跡	矢吹町白山 231 番地他	12,600	3,900	

以上の調査成果に基づいて、工事事務所は、本町教育委員会に当該埋蔵文化財の調査を委託した。町教育委員会では6月26日に県教育庁文化課と協議し、9月2日から9月13日までの延べ10日間と、9月24日から10月4日までの延べ9日間の期間で試掘調査を実施する計画を策定した。調査遺跡は、用地買収が未了の下宮崎B遺跡を除く7ヶ所である。調査は条件整備の整った上宮崎A遺跡から開始し、小又・下宮崎A・白山C・白山B・白山A・上宮崎Bの順で実施した。途中、上宮崎B遺跡でビニールハウスのため約半分の範囲が調査できなかったが、ほかは順調に進捗し、最後に上宮崎A遺跡の白河営林署矢吹種苗事務所内の掘削が許可されたので、この部分の調査を行って期間内の調査を完了した。しかし、白山C遺跡の調査に不十分な箇所があったので、11月19・20日に補足調査を実施した。

第2章 調査の成果

1. 上宮崎A遺跡

西白河郡矢吹町上宮崎

調査期間 平成8年9月2日～6日・10月3～4日

【遺跡の概要】 上宮崎A遺跡は、平成8年5月にあぶくま南道路建設に伴って矢吹町教育委員会が実施した表面調査で、奈良・平安時代の遺物散布地として発見・登録された遺跡である。遺跡は、JR東北本線矢吹駅から東南東に約2.5kmの地点に位置し、南側には県道石川一矢吹線が走り、西側は白河営林署第1種苗事業所敷地である。遺跡の立地は、洪積世段丘堆積物である郡山層の台地上で、南側には阿武隈川支流の浅い小支谷が開析している。現況は水田と畑地である。

【遺構と遺物】 調査は、道路建設予定地内の調査対象面積9,100㎡に28ヶ所のトレンチを設定して行った。調査の結果明らかになった本遺跡の基本層序は次のとおりである。L1は、暗褐色の耕作土と黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が混り合った盛土に分けられる。前者は18～22cmの層厚であるのに対し、後者は各トレンチで大きな違いを示す。盛土を認めたトレンチは、南から1～10・12～14・16・17・20・21の各トレンチである。特に8T・10Tでは66cmと71cmを測り、最も厚く堆積し、北側と南側に向かって薄くなっている。南側の5～7Tでは31～33.5cm、1～4Tでは11～21cmに

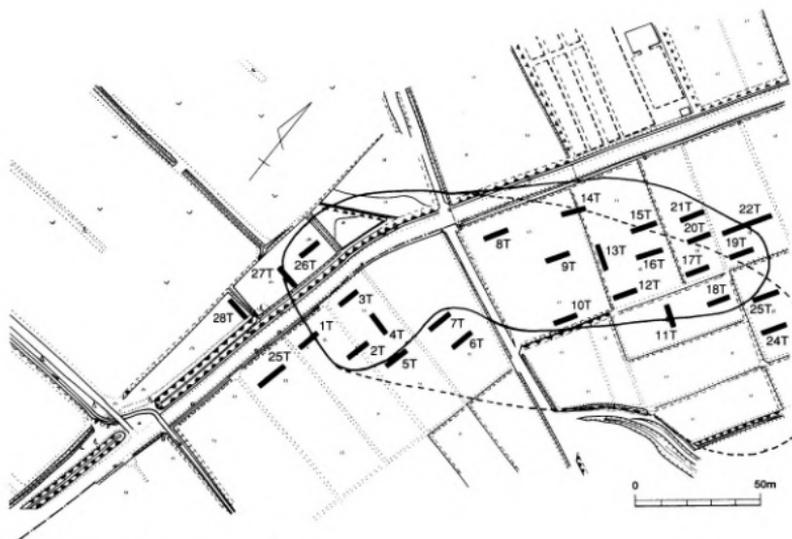


図2 上宮崎A遺跡トレンチ配置図

第2章 調査の成果

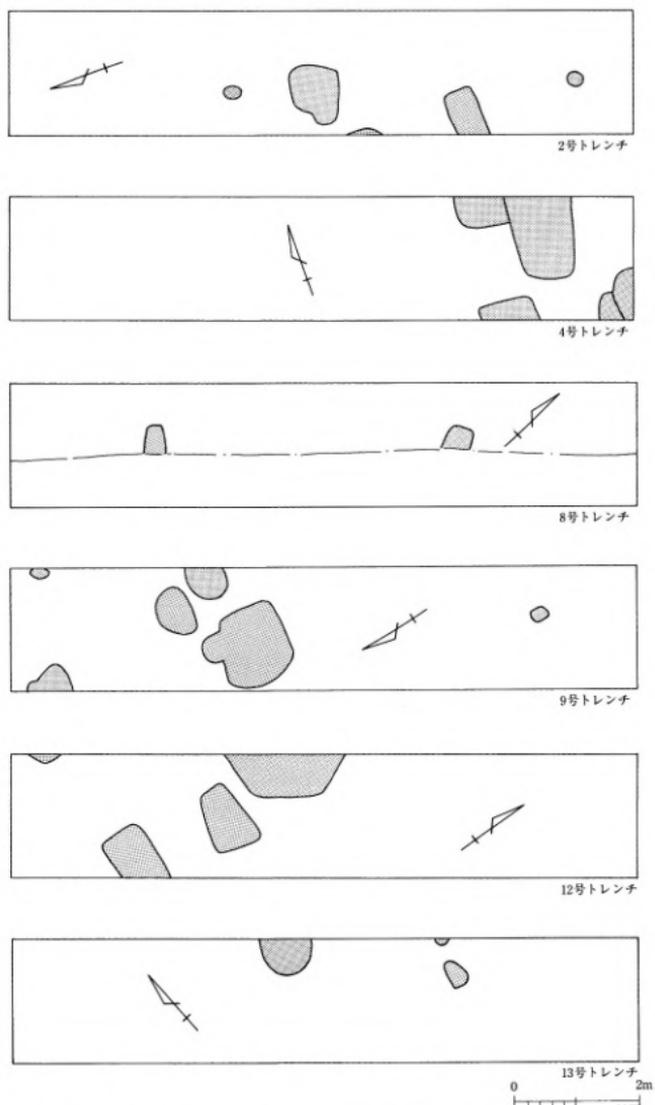


図3 上宮崎A遺跡検出遺構(1)

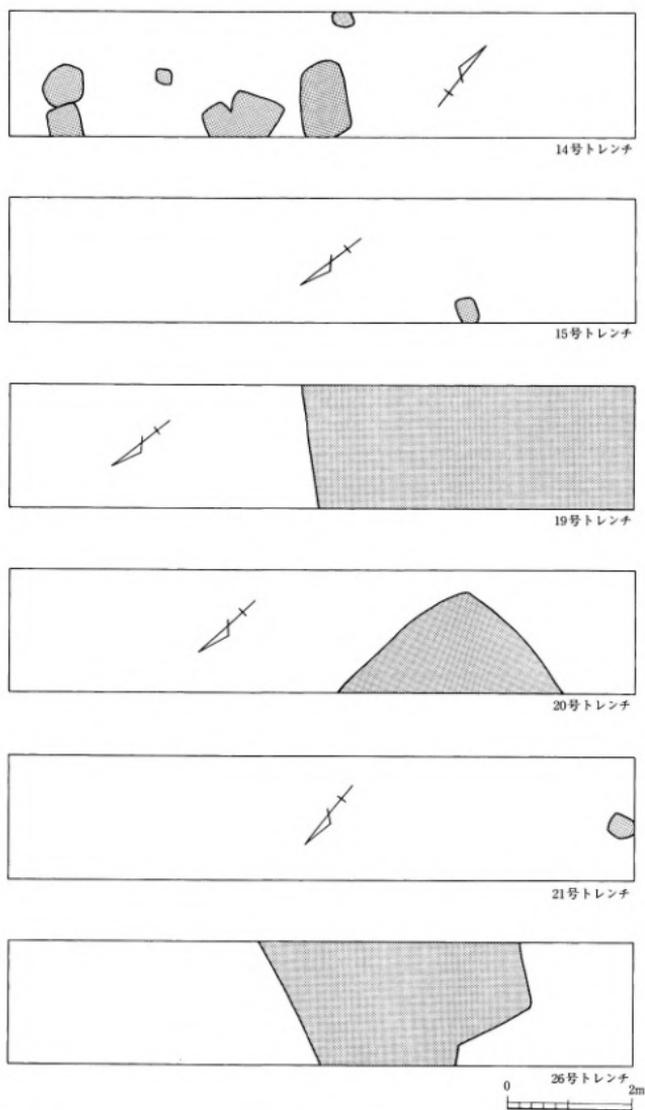


図4 上宮崎A遺跡検出遺構(2)

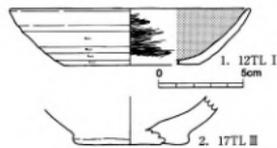


図5 上宮崎A遺跡出土遺物

なり、南端に位置する25Tには盛土は観察されない。逆に北側では9Tで42.5cm、12・13Tで26~27cm、14・16・17・20Tでは6~18cmで、11・15・18~24Tには盛土は認められない。L IIは黒褐色土で、盛土が観察されたトレンチにだけに認められた。3・6~8・9・13Tで30~43cmの層厚、1・2・4・5・12・14Tでは16~24.5cm、16・17・20・21Tでは6~13cmの層厚を測る。ほぼ盛土の下にだけ堆積が見られることから旧表土と考えている。L IIIは暗褐色土で、沼沢バミスを含んでいる。1~10・12~16・20・21・25Tに分布し、その広がりやL IIの分布域とほぼ一致する。層厚は1・6・7Tで33~35cm、3~5Tで24~29cm、2・8~10・12・14・16・20・25Tでは11~19cm、15・21Tで7~7.5cmを測る。L IVは暗褐色土と黄褐色土の混合土で、L IIIとL Vの漸移層と思われる。4・8・13~15・19~21・26Tでは、この上面で遺構を検出している。遺跡北側の11・12・22~24Tでは欠層している。1・2・5・6・9・16TでわかったL IVの層厚は10~14cmである。6~8Tではこの層に達すると湧水した。L Vは黄褐色土でロームである。

遺構は、2Tで土坑3基と柱穴2基、4Tで土坑5基、8Tで土坑2基、9Tで土坑4基と柱穴2基、12Tで土坑1基と柱穴3基、13Tで土坑1基と柱穴2基、14Tで土坑1基と柱穴6基、15Tで土坑1基、19Tで溝1条、20Tで竪穴住居跡1軒、21Tで柱穴1基、26Tで竪穴住居跡1軒が検出された。

遺物は、2Tで土師器と須恵器の破片1点ずつ、3Tでは土師器破片4点、4Tでは土師器破片2点、8Tでは土師器破片1点、9Tでも土師器破片が2点、10Tでは土師器と須恵器の破片1点ずつ、13・14Tでは土師器破片1点ずつ、17Tでは須恵器破片2点と土師器破片1点、18・20・26Tでは土師器破片1点ずつが出土した。図5-1は12T出土のロクロ土師器杯である。図5-2は17T出土の非ロクロ土師器甕である。図化できなかった土師器にはロクロ不使用の杯も認められる。
 [まとめ] 以上の調査成果から次のことが明らかになった。地表面では平坦に見える遺跡地形だが、圃場整備による土砂の移動のため、遺跡中央やや西よりに浅い谷が埋没していることがわかった。そして、この谷は遺跡の南東方にある谷の延長線上にある。遺構は竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑などである。遺構が検出土層はL IVが多いが、20Tの住居跡の掘り込み面はL IIIからになっており、L IIIにおける遺構検出も可能かもしれない。出土遺物から判断される遺跡の時期は、奈良時代から平安時代の初期と思われ、遺構の構成から集落跡と推定される。保存面積は9,800㎡である。

2. 上宮崎B遺跡

西白河郡矢吹町上宮崎

調査期間 平成8年10月1日~2日

[遺跡の概要] 上宮崎B遺跡は、平成8年5月に矢吹町教育委員会が実施した表面調査で、古墳

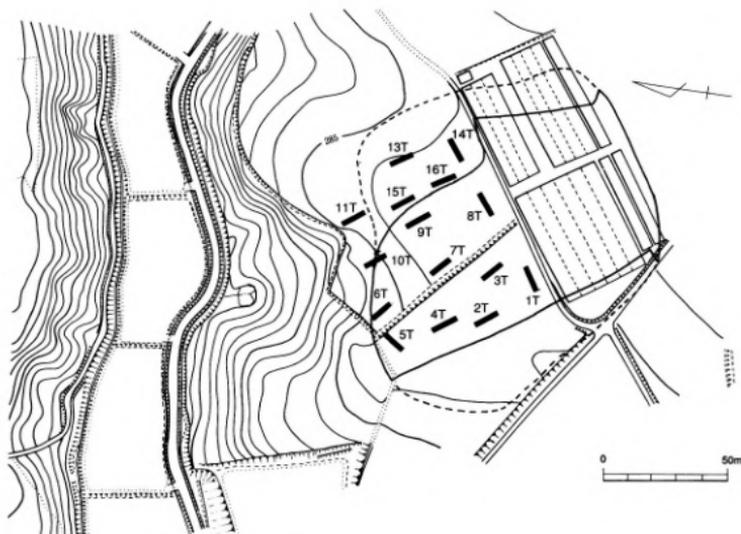


図6 上宮崎B遺跡トレンチ配置図

～奈良時代の遺物散布地として発見・登録された遺跡である。遺跡は上宮崎A遺跡から北東約500mに位置し、北側約550mには県道矢吹～小野線を望む。遺跡の立地は、阿武隈川支流によって浸食された半島状の小支丘上に立地している。現在は大部分畑地として利用されている。

【遺構と遺物】 本遺跡の道路建設予定地内における調査対象面積は8,900㎡だが、遺跡南半分のビニールハウスと作物が撤去されないまま、調査に着手せざるをえなかったため、対象範囲の北半分に設定した16ヶ所のトレンチの調査を行うにとどまった。調査の結果わかった本遺跡の基本層序は次のとおりである。LⅠが暗褐色の耕作土で、すべてのトレンチに共通して認められる。LⅡは沼沢パミスを含む暗褐色土で、LⅠより堅くしまっている。この層は6Tにだけ認められた。上面で木炭燻跡を検出したため層厚は確認していない。LⅢは1Tだけに認められた暗褐色土と黄褐色土の混合土である。LⅣが黄褐色土なので、この層の漸移層と思われる。なお、黄褐色土はロームである。

遺構は、1Tで溝1条、2Tで柱穴1基、6Tで木炭燻跡1基、7Tで土坑が1基、8Tと9Tで溝を1条ずつ検出した。

遺物は、土師器の破片が2・4・5Tで出土した。土師器には非ロクロの丸底杯口縁部から底部の破片がある。外面は口縁部から体部がヨコナデとナデ、底部がケズリ、内面は全体がヘラナデである。土師器甕の底部破片は、内外面にはナデが見られ、ロクロ使用の痕跡はない。

【まとめ】 前述のように、調査範囲のすべてを調査できなかったが、以上のような成果を得るこ

第2章 調査の成果

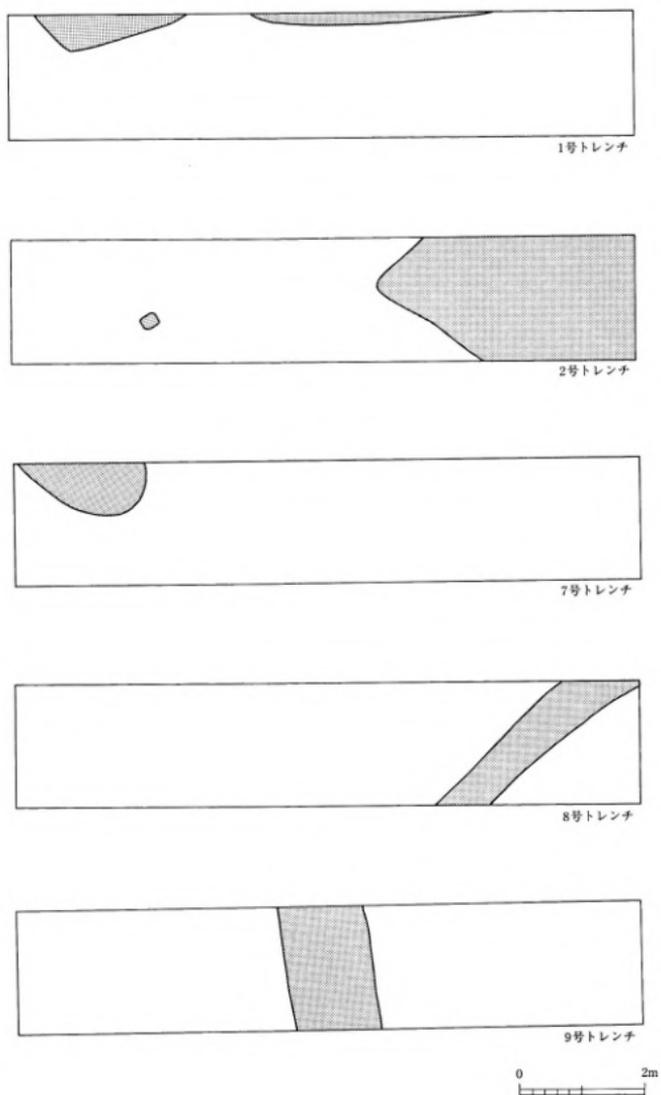


図7 上宮崎B遺跡検出遺構

とができた。地形は台地上を成すが、東方に向かって緩やかに傾斜しており、6 T付近から小支谷のはじまりである。6 Tの木炭窯以外遺構は台地上で検出された溝や土坑などである。遺物は丸底杯が内黒でないこと、体部から口縁部が内湾していることから、古墳時代後期以前の時期は想定される。また、溝の堆積土に群馬県榛名山のテフラ（以下HrFPと略す）が層を成すことから、これらの溝跡は6世紀中葉以前の所産と見て間違いない。住居跡が検出されないので断定できないが、古墳時代中期から後期の集落跡の可能性があり、保存面積は未調査の部分も含めると現時点では7,800㎡である。

3. 小又遺跡

西白河郡矢吹町下宮崎

調査期間 平成8年9月9日～11日

〔遺跡の概要〕 小又遺跡は、縄文時代の遺物散布地として昭和46年に登録された周知の遺跡だが、あぶくま南道路建設関連で実施した矢吹町教育委員会による表面調査で、土師器や須恵器の破片が当初の遺跡範囲の北東側約150mの範囲にまで広がっていることがわかり、奈良・平安時代の遺跡も包含する複合遺跡であることが明らかになった。遺跡は、上宮崎B遺跡の東方約500mに位置し、同遺跡と同様半島状の小支丘上に立地している。現在の地目は大部分が畑地で、南東側の一部が雑木林である。

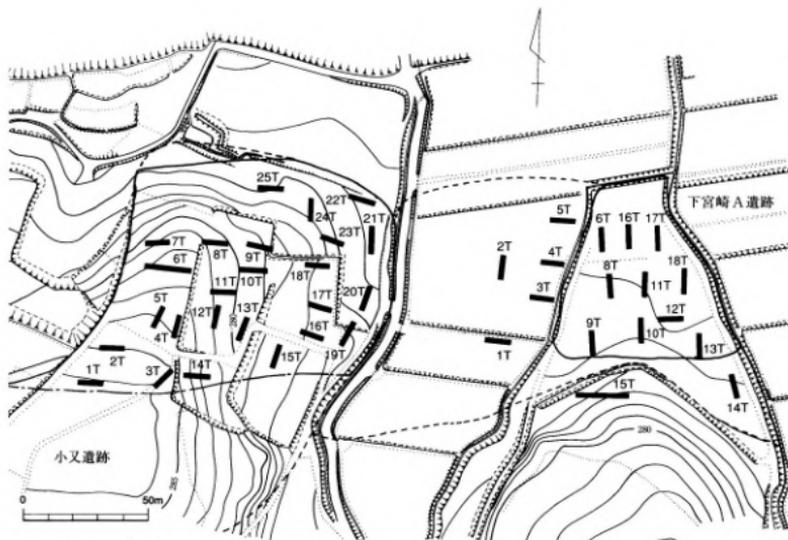


図8 小又・下宮崎A遺跡トレンチ配置図

第2章 調査の成果

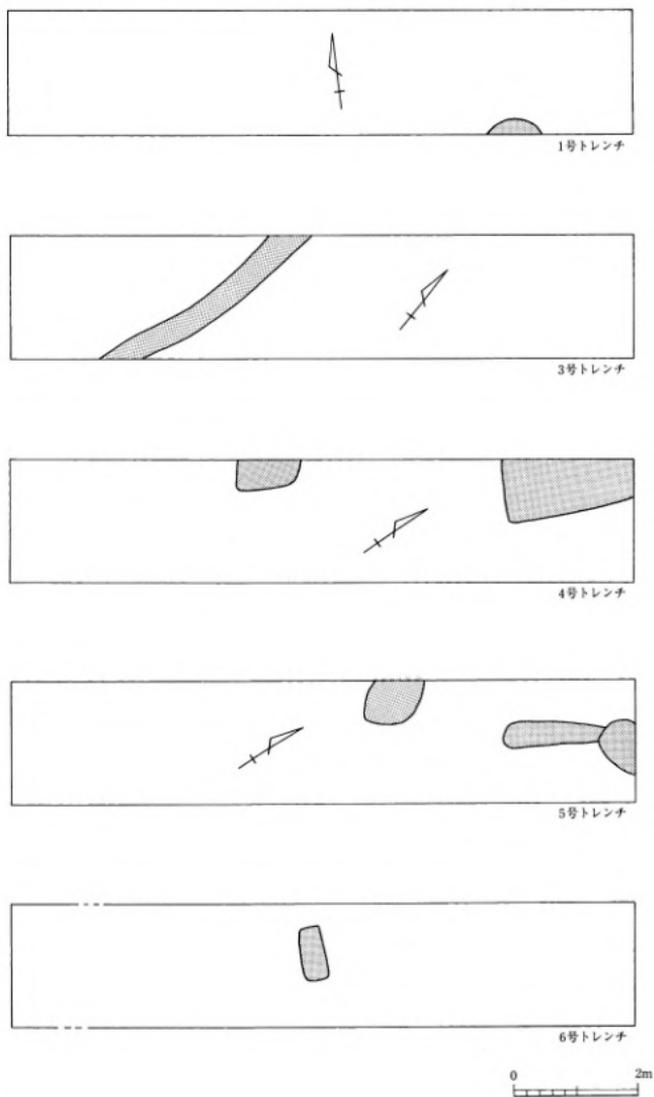
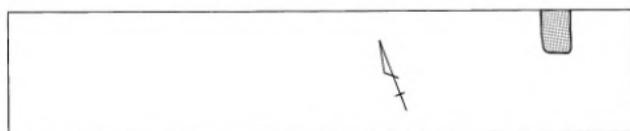
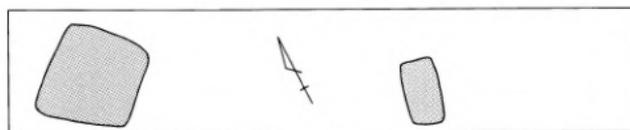


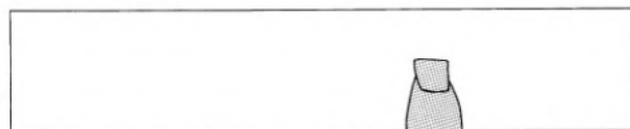
図9 小又遺跡検出遺構(1)



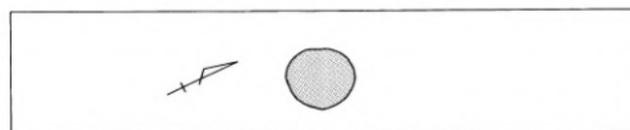
7号トレンチ



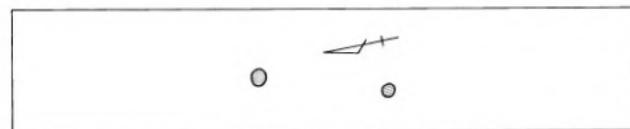
8号トレンチ



11号トレンチ



12号トレンチ



13号トレンチ

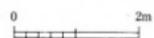


図10 小又遺跡検出遺構(2)

第2章 調査の成果

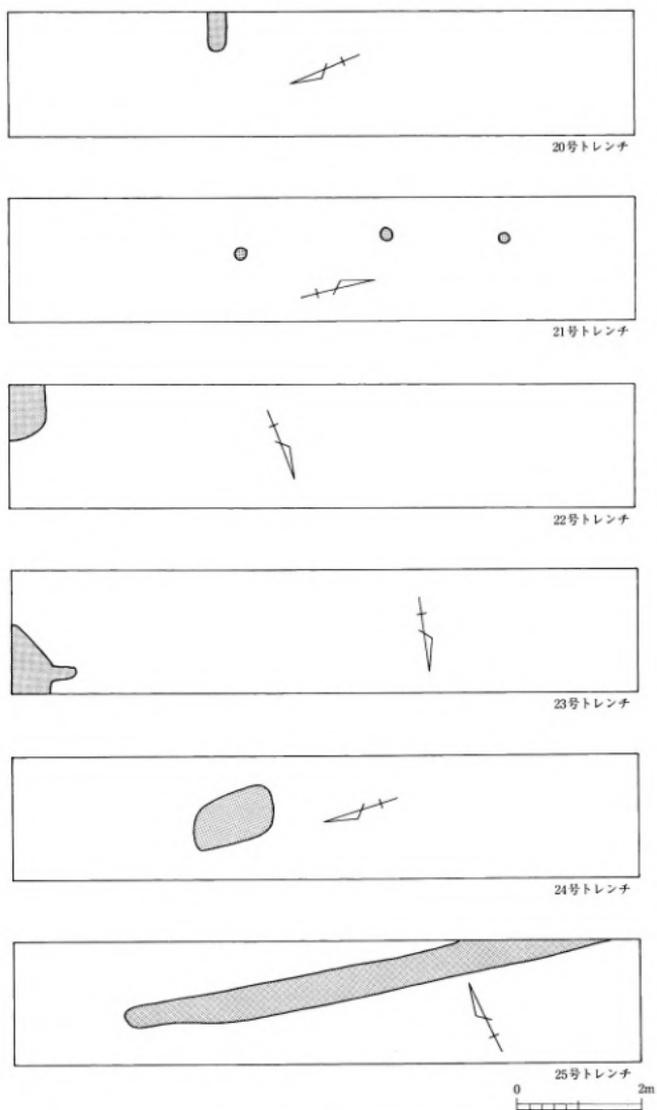


図11 小又遺跡検出遺構(3)

〔遺構と遺物〕 調査は、道路建設予定地内の調査対象面積9,200㎡に25ヶ所のトレンチを設定して行った。保存面積は9,400㎡である。調査の結果明らかになった遺跡の基本層序は次のとおりである。LⅠは暗褐色土で耕作土である。すべてのトレンチに認められた。LⅡも暗褐色土だが、沼沢バミスを含み、LⅠよりも堅くしまっている。遺跡北東部の斜面下方に設定した20～22T付近にだけ堆積が見られた。LⅢもLⅡと同じ範囲にだけ認められた暗褐色土と黄褐色土の混合土である。LⅣは調査域全体に認められた黄褐色のローム層である。23～25TではLⅣに凝灰岩の小塊を含む。

遺構は、調査区域全体に分布している。竪穴住居跡は17・23Tで検出した。1・4～8・11・12・15・16・18・20・24Tでは土坑を検出した。4～8・15・16・18・20・24Tの土坑はその平面形から見て縄文時代の落とし穴と考えられる。なお、11Tの土坑堆積土中にはHrFPの堆積が認められた。この土坑を切ってこのトレンチでは柱穴が検出されている。掘立柱建物跡の存在も想定される。

遺物は、3Tで石礫と同一石材の剥片が、13Tでは胎土に繊維を含んだ縄文早期末から前期初頭の土器破片（図23-1）が、12Tでは削器が出土している。また、22Tでは縄文後期初頭の土器破片（図23-10）がLⅡから出土した。17Tと21Tでは土師器の破片が出土している。このうち17Tでは住居跡も検出されている。この中にはロクロ不使用杯あるいは高台杯の破片、ロクロ使用甕の破片混じっている。杯はほとんど内黒でミガキが施されている。

〔まとめ〕 本遺跡は従来より縄文時代の遺跡として周知されていた。今回の調査でわかった縄文時代の遺構は、ほぼ調査区全域に散見される落とし穴である。遺物としては早期末葉～前期初頭および後期初頭の土器破片が出土している。古代の遺構としては、HrFPの入った土坑があることから古墳時代中・後期の遺構・遺物が他にも検出される可能性がある。17Tの竪穴住居跡堆積土上部から出土している土師器破片には奈良時代後半～平安時代の所産と思われるものが含まれており、当該時期の住居跡と考えている。また、掘立柱建物跡の一部と思われる柱穴もある。遺構・遺物が調査区域の全体で検出されていることから、保存範囲も当該区域とほぼ同一範囲で、面積は9,400㎡である。

4. 下宮崎^{しもみやざき}A遺跡

西白河郡矢吹町下宮崎

調査期間 平成8年9月12日・13日

〔遺跡の概要〕 下宮崎A遺跡は、小又遺跡の東方に開析谷を挟んで隣接する奈良・平安時代の遺物散布地である。平成8年5月の矢吹町教育委員会による表面調査で発見・登録された。遺物散布範囲は、半島状の小支丘先端から小又遺跡とのあいだの谷部に広がっている。現況は畑地と水田である。

〔遺構と遺物〕 調査は、道路建設予定地内の調査対象面積11,800㎡に18ヶ所のトレンチを設定して行った。調査の結果明らかになった遺跡の基本的な堆積土の層序は次のとおりである。LⅠは耕作土で、調査区域全体で20～28cm認められる。小支谷水田部の1～5TではLⅡとして黒褐色土と

第2章 調査の成果

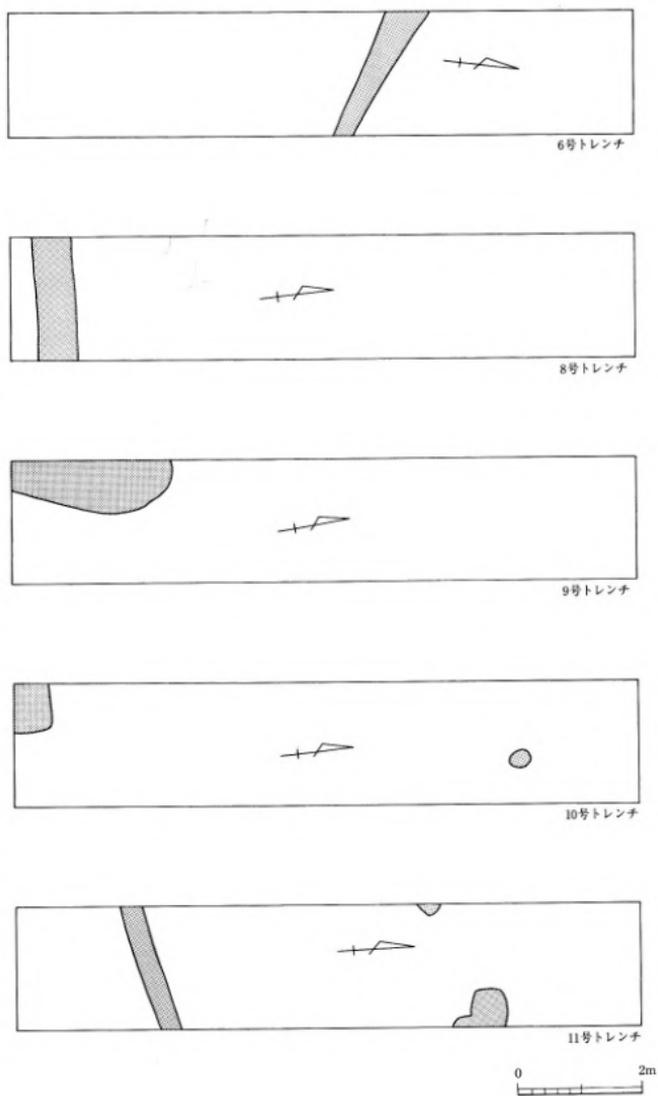
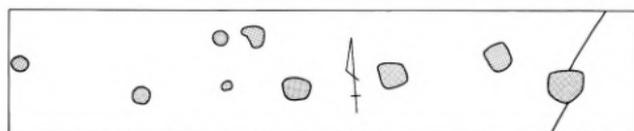


図12 下宮崎A遺跡検出遺構(1)



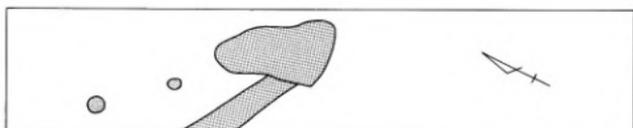
12号トレンチ



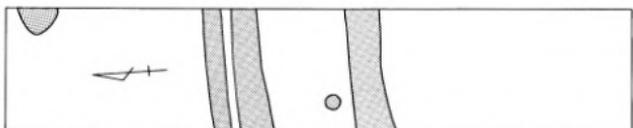
13号トレンチ



16号トレンチ



17号トレンチ



18号トレンチ



図13 下宮崎A遺跡検出遺構(2)

第2章 調査の成果

黄褐色土の入り混じった盛土が10~24cmの厚さで認められる。LⅢは暗褐色土で、1~5Tでだけ観察でき、11~74cmの層厚があり、旧表土と思われる。LⅣは2Tの深部でだけ観察されたHrFP層である。自然流路に堆積したと思われる。LⅣは小支丘部分の8~14・16~18Tで観察された黄褐色土に暗褐色土がまだらに混り合った土層で、2~18cmの層厚がある。9・10・12・13・17・18Tではこの層で遺構が検出されている。LⅤは黄褐色土で、6~8・11・14~16Tでこの層で遺構が検出された。

遺構は、丘陵部で検出された。検出遺構の内訳は次のとおりである。堅穴住居跡12Tで検出されたのはじめ、掘立柱建物跡の一部と思われる柱穴が10~12・17・18Tで、土坑が9Tで検出されたほか、溝跡が6・8・11・13・16~18Tで検出された。

遺物は、図23-2~4は縄文時代の繊維土器で、2は外面は捺土文を地文に沈線文が施され、内面は条痕文によって仕上げられている。9・10・12・13Tでは土師器・須恵器破片が出土しているが、ロクロ土師器杯は内面はミガキ黒色処理が、外面には口縁部近くまで回転ヘラケズリが加えられている。

【まとめ】 以上の調査結果から、本遺跡は平安時代の初頭を前後する時期に営まれた集落跡の可能性が高く、西側の小又遺跡との関連性が興味深い。縄文土器は早期末葉の大畑G式土器の特徴を有しており、当該期の遺構も多少あると思われる。保存範囲は小支丘先端の畑地の大部分を囲む面



図14 白山A遺跡トレンチ配置図

積にして3,200㎡の区域としたい。

5. 白山A遺跡

西白河郡矢吹町白山

調査期間 平成8年9月27・28日～10月1日

【遺跡の概要】 白山A遺跡は、平成8年5月に矢吹町教育委員会が実施した表面調査で発見・登録された縄文・古墳～平安時代の遺物散布地である。遺跡は、前述の下高崎A遺跡から東方約750mに位置し、北方に突き出た台地状の小支丘上に立地している。現況は畑地と一部雑木林である。

【遺構と遺物】 調査は、道路建設予定地内の調査対象面積5,900㎡に11ヶ所のトレンチを設定して行った。調査した結果わかった本遺跡の基本堆積土は、LⅠは耕作土で20～30cmが攪乱されている。LⅡは東側の山林部設定の11Tにのみ認められた暗黄褐色土である。このトレンチではLⅠも表面が腐葉土の暗褐色土である。LⅢは黄褐色のローム層である。なお、遺構検出面はLⅢである。

遺構は、1Tを除いた10ヶ所のトレンチで検出された。堅穴住居跡を検出したトレンチは、2・6・7Tである。そのほかに、土坑が3～6・8・10・11Tで、柱穴が3・4・6・7・9Tでそれぞれ検出された。

遺物は、縄文土器(図23-7～9)が5・8Tで出土している。これらは器外面を連続刺突文で装飾するもので、口縁部には刻み目が施されている。図14は6Tの土坑検出面で出土した須恵器杯身の破片である。土器器は2・6・8・11Tから出土している。図23-12は球胴形の胴部を持つ非ロクロ土器器の破片も出土している。

【まとめ】 以上の調査成果から、本遺跡の性格や範囲を次のように推定する。遺構の分布は調査区域のはほぼ全域に及んでおり、なお台地先端に広がると思われるが、台地の基部に当たる南側までは広がらないと推定される。堅穴住居跡の所属時期は特定できないが、図14の須恵器が古墳時代中



図15 白山A遺跡出土遺物

期後半の所産であること、土器器破片に当該時期の特徴を見いだせることから、古墳時代中期を中心とした集落跡と推定される。また、縄文土器は浮島式・興津式土器の文様的特徴があるので、前期後半の遺跡としても注目される。保存面積は3,100㎡とする。

6. 白山B遺跡

西白河郡矢吹町白山

調査期間 平成8年9月27日

【遺跡の概要】 白山B遺跡は、白山A遺跡の東方約200mの半島状小支丘上に立地している。平成8年5月の矢吹町教育委員会による表面調査で、縄文時代の遺物散布地として発見・登録された遺跡である。現況は畑地だが、畑地造成の際に大きく地形を改変しているように思われた。

【遺構と遺物】 調査は、道路建設予定地内の調査対象面積5,900㎡の範囲に20ヶ所のトレンチを設定して行った。調査のよってわかった本遺跡の基本的な堆積土は、表土は暗褐色の耕作土(I a)と黒褐色土や黄褐色土などが混り合った盛土(I b)とに分けられる。LⅠaは29～40cmの層厚が

第2章 調査の成果

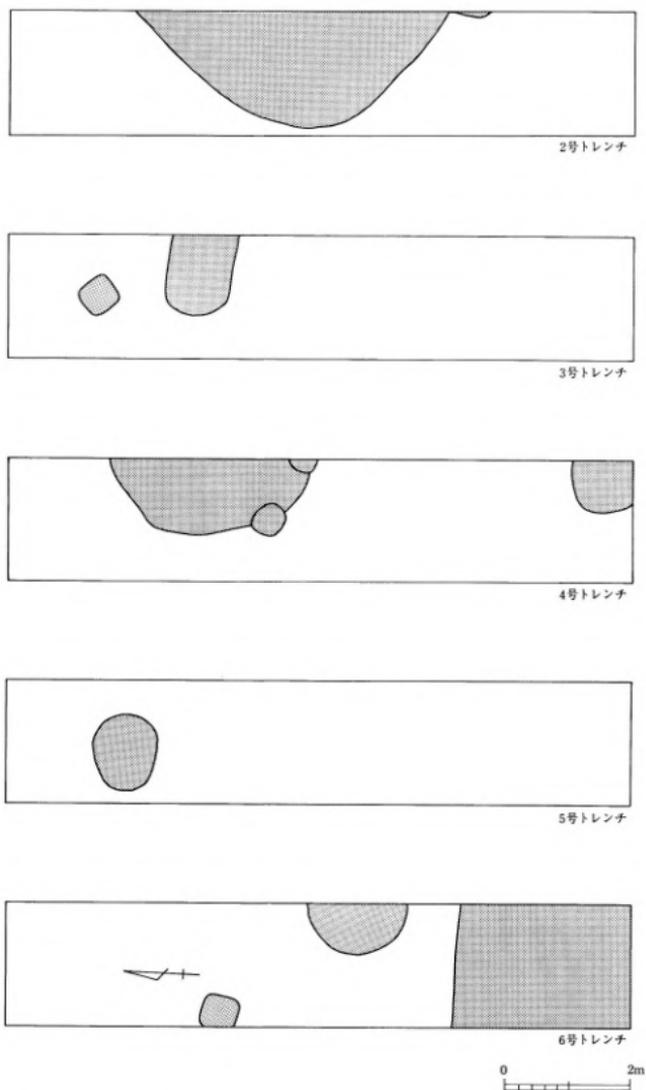
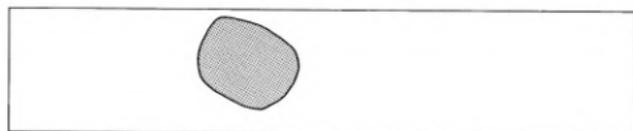


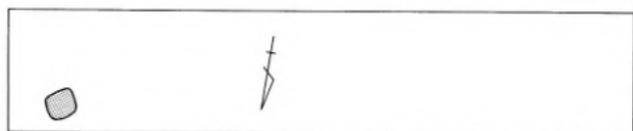
図16 白山A遺跡検出遺構(1)



7号トレンチ



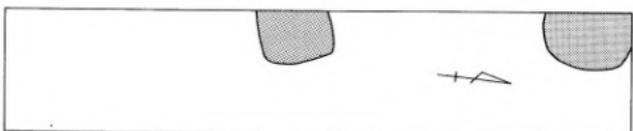
8号トレンチ



9号トレンチ



10号トレンチ



11号トレンチ



図17 白山A遺跡検出遺構（2）



図18 白山B遺跡トレンチ配置図

7. 白山C遺跡

西白河郡矢吹町白山

調査期間 平成8年9月24～26日, 11月19・20日

〔遺跡の概要〕 白山C遺跡は、平成8年5月に実施された矢吹町教育委員会の表面調査で、奈良・平安時代の遺物散布地として発見・登録された遺跡である。遺跡は白山B遺跡の北東方約400mに位置しており、北方約350mに県道矢吹-小野線を望む。遺跡の立地は、主開折谷に面した丘陵上で、北側と西側から小支谷が入り込んでいるため、南側がくびれて土橋状になっている。現況は畑地・雑木林・原野である。

〔遺構と遺物〕 調査は、道路建設予定地内の調査対象面積3,900㎡に18ヶ所のトレンチを設定して行った。調査によってわかった本遺跡における基本的な堆積土の層序は次のとおりである。L Iは暗褐色の土層で、1～8Tは耕作土層であり、9～18Tでは山林の腐食土層である。L IIは黒褐色土と黄褐色土がまだらに混り合った土層で、L IIIの黄褐色土の漸移層である。

遺構は、3～5・7～10・12～15の各トレンチで検出された。堅穴住居跡が8～10・13・15Tの5ヶ所のトレンチで、土坑が3～5・7・12～14のそれぞれのトレンチで、溝跡は14Tで検出された。このほかに7・8Tで掘立柱建物跡の一部とみられる柱穴が検出されている。なお、調査区東側の畑と山林の境界に土塁状の高まりが認められ、さらに東側の山林斜面には狭長な平場と、2基の板碑を発見した。

遺物は、9・11・13・18Tから縄文土器・土師器の破片が出土した。図23-5・6は11Tから出

すべてのトレンチで識別できた。L I bは畑周縁の1～4Tでだけ認められ、法面向かって厚く堆積していることから、畑開削の時に押し出して法面を成形していると考えられる。L IIIは黄褐色土で7～10Tで認められた。1～6Tでは灰白色の凝灰岩層のL IVが露出した。遺構・遺物は検出できなかった。

〔まとめ〕 本遺跡の道路建設予定地内では、今回の調査で遺構・遺物は検出できず、表面調査でも採集できた遺物は少量だった。堆積土の状況から推察すると、耕地の造成の際に壊滅した可能性が高い。しかし、予定地からはずれる南側の山林は開発が行われていないとみられ、こちらに遺跡の広がる可能性は否定できない。



図19 白山C遺跡トレンチ配置図

土した胎土中に植物繊維を多量に含んだ縄文時代早期末葉の土器破片である。5は器表面に燃糸文が認められる。6の外面は条痕文である。土師器は9 Tから特に多く出土した。内面が黒色処理された杯と思われる破片がいくつかみられ、それらにはロクロを用いて製作したものと、そうでないものがある。後者には体部に段のあるタイプと思われる破片も認められる。図23-13は土師器甕の胴部破片と思われる。器内外面ともにナデによって仕上げられている。図23-17は瓷器系の中世陶器の底部破片である。

【まとめ】 今回の調査の結果、遺構・遺物は北半分の平坦地に設定したトレンチから多く検出されている。11 Tで出土した縄文早期の土器から、縄文時代の集落跡を想定できるが、出土土器の多くは内黒土師器の破片で、奈良時代前期から平安時代前期の範疇に含まれる。また、土師器の中には赤褐色を呈するものがあり、古墳時代後期の遺物の可能性がある。9 Tを中心に堅穴住居跡が検出されているが、これらの住居跡は出土遺物から奈良時代前期から平安時代前期の所産と思われる。調査区域の南側でも土師器を伴う堅穴住居跡が検出されているので、本遺跡の中心は、古墳時代から平安時代に営まれた集落跡と思われる。しかし、縄文土器や中世陶器や板碑、あるいは土塁状の高まりや平場などが認められることから、ほかの時代にも遺構が営まれた複合遺跡と考えられ、保存措置を必要とする範囲の面積は10,500㎡である。

第2章 調査の成果

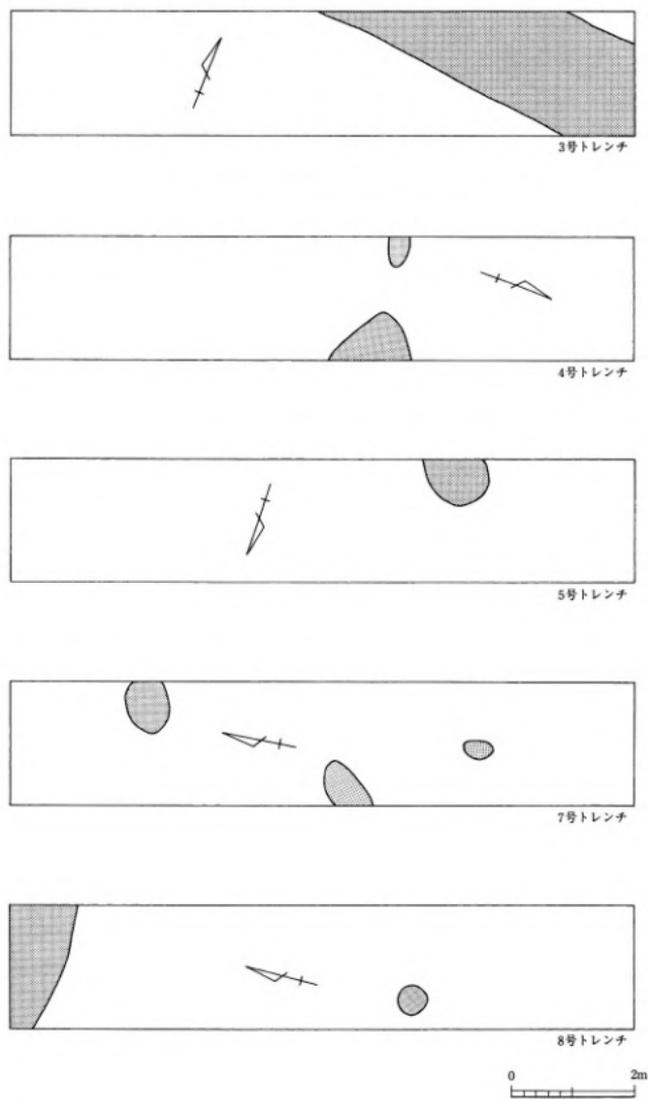


図20 白山C遺跡検出遺構(1)

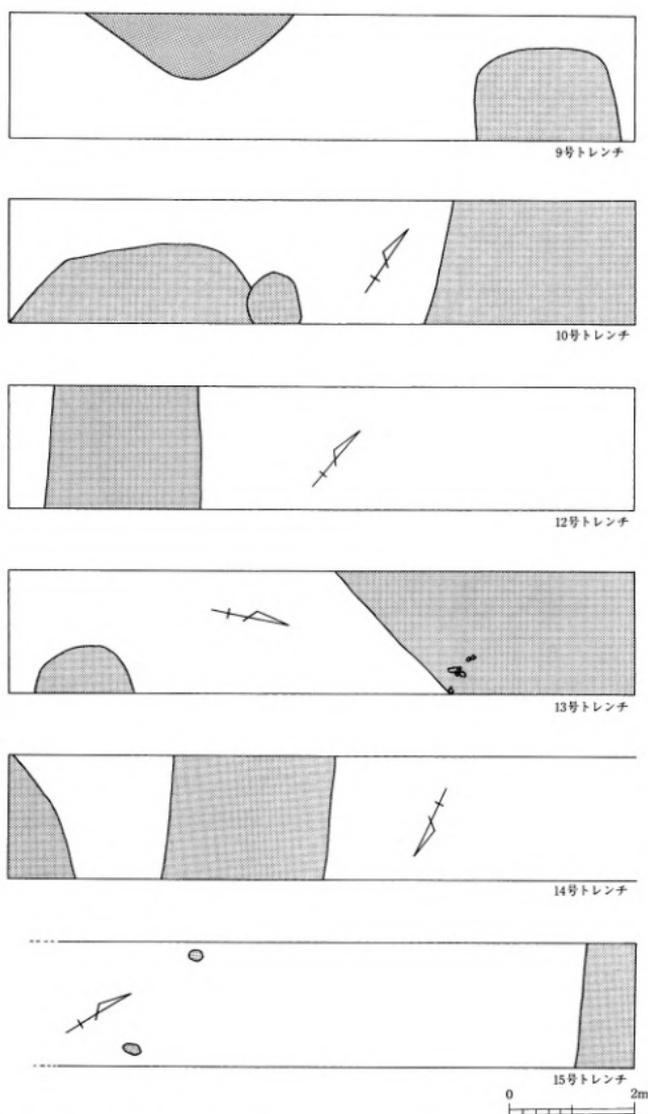


図21 白山C遺跡検出遺構（2）

第2章 調査の成果

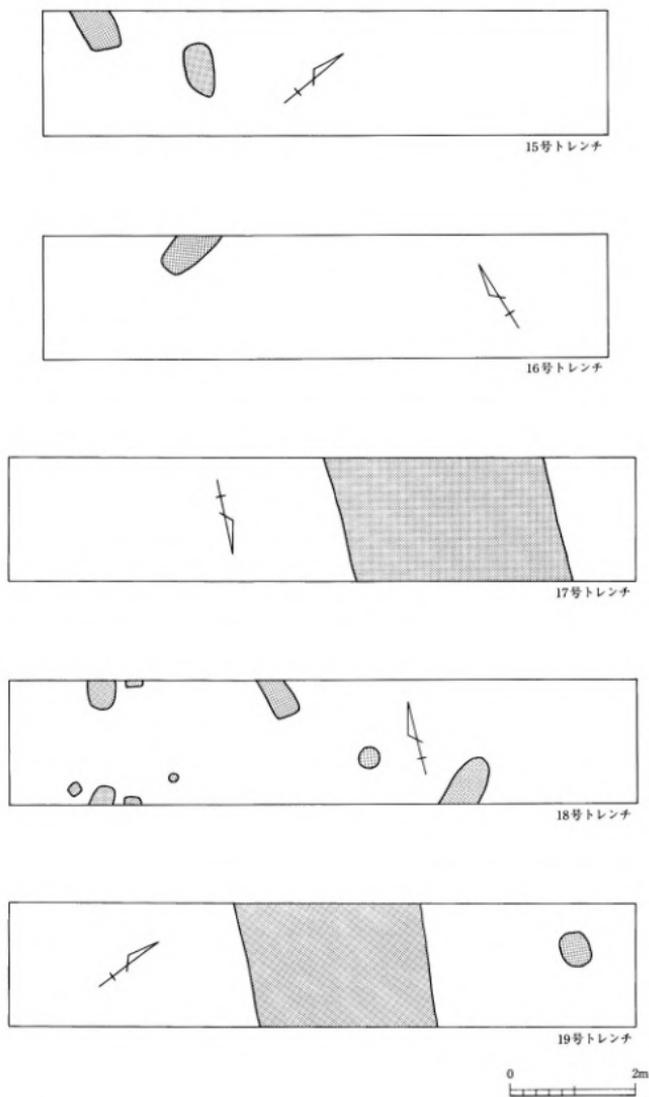


図22 白山C遺跡検出遺構（3）

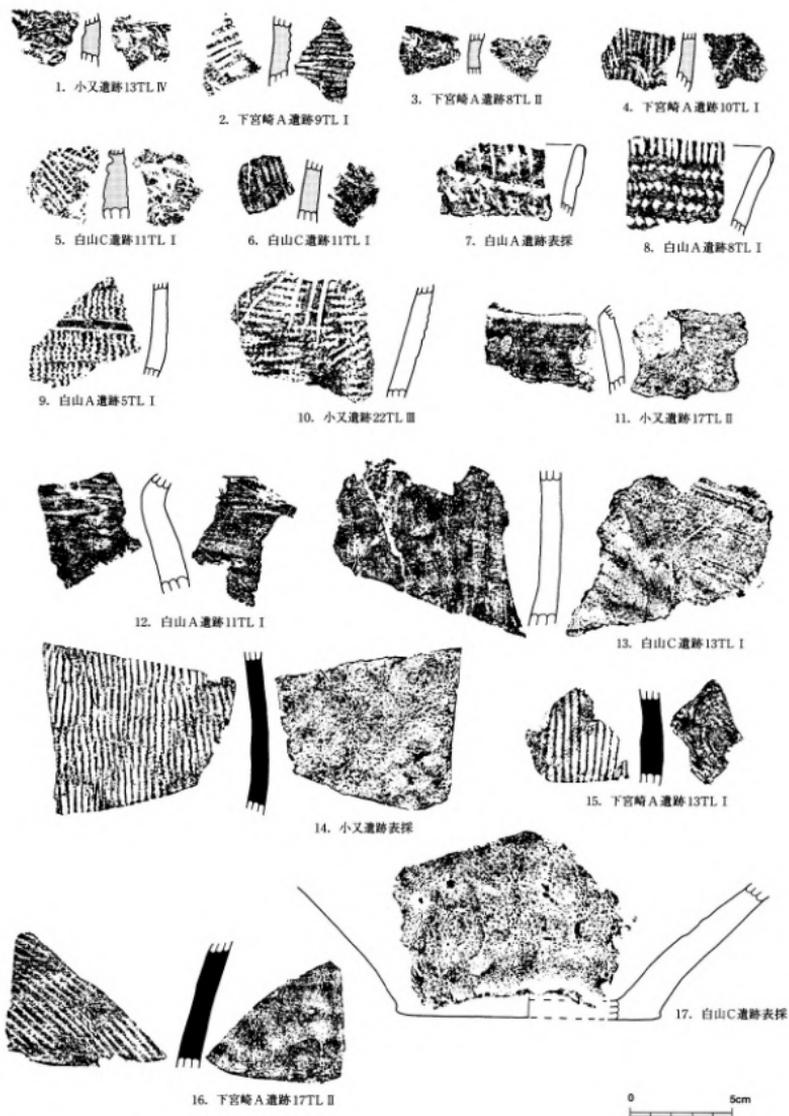


図23 各遺跡出土遺物

第3章 ま と め

あぶくま南道路建設に伴う今回の遺跡分布調査では、表面調査によって矢吹町上宮崎・下宮崎地区、および白山地区で7ヶ所の新発見遺跡と、1ヶ所の周知の遺跡が確認された。それぞれ路線内に遺跡範囲が及ぶことから、7遺跡について路線内遺跡範囲確定のために試掘調査を実施し、前章のような成果を得た。調査遺跡は阿武隈川支流の開析谷に面し、上宮崎A遺跡が小支谷の谷奥にあるほかは、ほとんど小支丘上にあることが共通した立地上の要素である。

出土遺物や検出遺構を古い順にみていくと、縄文土器が出土した遺跡は、小又・下宮崎A・白山A・白山Cの各遺跡である。早期末葉か前期初頭の土器がでた遺跡は、小又・下宮崎A・白山C遺跡で、小又遺跡では石鏃や削器などの石器や、落とし穴が10ヶ所のトレンチから検出されている。また、縄文後期初頭の土器も出土していることから、縄文時代でも複数の時期に遺跡が営まれている。白山A遺跡では前期中葉から後葉の土器が出土した。古墳時代の遺構・遺物が検出された遺跡は、上宮崎B遺跡と白山A・白山Cの両遺跡である。上宮崎B遺跡はHrFPを含む溝跡を3ヶ所のトレンチで検出した。このテフラは古墳時代後期に降下したとされるので、溝跡はそれ以前の所産である。小又遺跡でも同一のテフラを含み土坑が検出されている。白山A遺跡では古墳時代中期後半の須恵器の入った土坑が検出された。竪穴住居跡も検出されているので、集落を構成していた可能性が高い。白山C遺跡では古墳時代中期から後期の所産と思われる赤褐色の土師器が出土しているが、遺構は不明である。白山C遺跡や小又遺跡では非ロクロの有段杯の破片が出土しており、その内彎する口縁部形態は奈良時代に多くみられる特徴であり、同トレンチでは竪穴住居跡も検出されていることから集落を形成していたと思われる。また、両遺跡では平安時代の土師器も竪穴住居跡を検出したトレンチから出土しており、奈良時代から平安時代にかけて継続的に集落が営まれた可能性がある。平安時代の遺構・遺物は、上宮崎A・下宮崎A・白山Aの各遺跡でも検出されており、特に上宮崎A遺跡は掘立柱建物跡を伴っており、当該時期の大きな集落跡の可能性が高い。白山C遺跡では、中世陶器が採集されたり、土塁状の高まりや帯郭状の平場、また板碑が発見されていることから、中世の何らかの施設が重複している可能性がある。本遺跡の西側に「和田館橋」があり、南側には和田館遺跡があることから、館跡の遺構が重複していると考えている。

このように、今回の分布調査で発見された主に古代の遺跡群は、東方で阿武隈川と合流する開析谷右岸に分布しているが、このような遺跡のあり方は、治水の難しかった古代において、この主谷や小支谷の水利で農業生産を維持していたと推察される。

福島空港・あぶくま南道路遺跡分布調査報告書

1999年3月31日 発行

発行 矢吹町教育委員会

〒969-0236 福島県西白河郡矢吹町一本木100-11

TEL 0248-44-4400 FAX 0248-44-4404

印刷 (株)平電子印刷所

〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内13
